

キラリ
光るまち

②

気がついたら12年

～ピラ配りから
学生との協働へ～

初夏を迎える6月の末、秋田駅から程なく、通りから大きな音楽が聞こえてくる。ヤートセ秋田祭が行われている。この祭は、地域の民謡や音楽をアレンジして踊る祭です。

昨年12回目を終え、約1800人ももの踊り子に参加し、街は熱気に包まれた。今年6月の13回に向け実行委員はすでに準備に追われている。

この祭が生まれた13年前、当時、郊外型の大型スーパーの影響で中心市街地の空洞化がニュースにも取り上げられていた時代、秋田も例外ではなく、秋田駅前は閑散としていた。そんな秋田の駅前で何か元気が出ることができないかと考えていた学生たちがいた。



地域の集会場を借りての準備作業

また、たまたま訪れた札幌で開催されていた「YOSAKOIソーラン祭り」を見て、秋田でもこのような祭ができないものかと考えていた年配のグループがあった。この方々が秋田大学でピラを配り、学生と出会い、今のヤートセ秋田祭の実行委員が誕生した。

祭のタイトルにある「ヤートセ」とは、秋田の民謡で歌いだしにある掛け声で、この祭を開催するにあたり、祭のタイトルとして秋田らしいネーミングを考えたところ、有名な秋田音頭の歌いだしの掛け声をそのまま祭のタイトルに用いたものである。



開祭を待つ観客

～問題解決と地域のかかわり～

地域との連携のきっかけは、通行規制の問題からだった。もともと、中心市街地にあつた空き地やイベント広場を利用して行っていたが、3年目に広場の改修工

事があり、その年、偶然にも道路を通行止めにして開催することが可能になった。

結果は散々だった。交通規制をかけることを甘く見ていたために、関係各所より厳しい言葉をいただいた。しかし運営側とは裏腹に、観客の方々からは、道路を通行止めにしての開催に高い評価をいただき、参加者からは、また道路で踊りたいという声が多く寄せられた。

もう一度、道路での開催をするには、地域の方々の



ヤートセ秋田祭実行委員会
事務局長

高橋 淳一



理解が必要不可欠だった。

当時、すでに通行止めをして行っていた地域の夏祭りが存在した。どうしたら、通行規制をかけられるのか、開催日と一緒にしてできないかなど、地元商店街組合の方々と、幾度となく話し合った。再度、通行規制の許可を得るまでの4年間、足繁く通ううちに、地域の方々とお互いに協力しあえる関係になっていった。

ありがたいことに、今では商店主の方が、次の年の開催を心配してくれている。

信頼関係を築くには、現地に行って顔を見て話すということの大切さを、改めて思い知らされた時期だった。

く気持ちしか持っていないから

祭は立上げるよりも継続していくことが難しい。12年目を終えたが、次の年を保証されることはない。以前は「この祭が来

年あるとは言えませんが」というメの言葉

を言っていたものだ。運がいいことに、12年間中止になることは一度もなかった。年々、規模拡大をしているこの祭だが、逆を言えば、その時々合った規模で開催してきたと言える。無理をしていない訳ではないが、その都度のタイミングで、行政窓口だったり、地域の方々であったり、協力者が増えていったように思う。がむしろに馬鹿なことを言い続けている若者に手を差し伸べてくれるのだ。

この祭の実行委員は、秋田に暮らす有志の若者が中心で構成されている。「お金も力もない私たちですが」という挨拶をした会長もいる。そのことを自覚しているからこそ、一生懸命に気持ちをぶつける。だからこそ、地域の方々が温かく見守っ



大旗の共演

てくれていることも感じられ、また地域のため



に何か恩返しが出来ないかという思いが生まれる。そして、また来年ここで会いたいと心から思えるのである。一口で12年といえど長い時間のように聞こえるが、運営としては、毎年なにかしらの問題に直面し、いつも第1回の立ち上げのような感覚で務めてきた。長く続けてきたというより、気がついたら12回やってたという感覚でいる。

10年程度続けるには、立ち上げの人間が頑張れば何とかなるが、同様にメンバーも年をとる。当然、私も12歳年をとった。今後、さらに続けていくには、次の年代から、この祭を続けていきたいという声が必要である。その為に、若い世代との交流、そして若い世代から愛される祭にすることが大切である。

6月、さらにヤートセ秋田祭を愛してもらえよう、次の世代がもう走り出している。

チーム演舞 (ヤートセ秋田 酔楽天)